
真・恋姫†無双・魏√END集

乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双・魏√END集

【Nコード】

N2508V

【作者名】

乱

【あらすじ】

魏√において、最後の別離^{わかれ}で一刀を見送ったのが華琳ではなく、他の誰かだったら？これはそんな「もしも」を書いてみた話。基本的には文官の女性が主人公で武官の女性は出番が無い。ifでの話でもしあの人物が魏に降っていたらという話も書きます。この話はTINAMIでも連載しています。

桂花1「別離（わかれ）」（前書き）

この話は僕が初めて書いたSSです。

もし、あの時華琳ではなく桂花が一刀を見送っていたら……
そんな事を考えながら書いた話です。

もう、二年たつんだなあ……

桂花1「別離（わかれ）」

闘いは終った、魏を華琳様、蜀を劉備、呉を孫策が治める三国同盟が締結されたのだ。

そして今は同盟を祝う宴でみんな盛り上がっている、華琳様は酔っ払った劉備と孫策に絡まれている。

春蘭は閑羽と飲み比べ、秋蘭は周瑜や陸遜と何やら話をしている。

他の皆も蜀や呉のみんなと楽しくやっているようだ、しかしそこにはアイツがない、こんな時にはみんなの中心で笑っているはずのアイツが何所にもいない、

私はなぜか一人でその場を後にした。

何かに導かれるように歩いて行くと小川のほとりに出た、そしてそこにアイツがいた。

今にも消えてしまいそうな儚さで…そして私は気付いた、気付いてしまった、

この時が来たのだと。

……………アイツがイナクナルということに……………。

サラサラサラ…………

「宴のまつ最中だつていうのにこんな所で何やってるのよ？」

「ん、？ああ桂花か、どうしたんだお前の方こそ華琳の所に行かなくていいのか？」

「ちよつと飲みすぎたからね。火照つた体を冷やそうと思つたら此処にアンタがいたのよ、それよりいいの？こんな所にいて、蜀や呉の女性達を落とす絶好の機会じゃない」

「ははは……そうだな、こんな機会もうないだろうな。ほんと……残念だよ……」

「残念がる必要なんてないじゃない、さっさと行つて来なさいよ」

「……」

「……華琳様……」

「えっ……」

「華琳様、呼んで来てあげましょうか？」

「いやいいよ、華琳にはそれとなく伝えてある、今頃もう気づいてる頃だ」

「そう、じゃあ季衣や流琉は？風達だつて……」

「勘弁してくれ、逝くのがつらくなる……せつかくきめた覚悟が揺らいじまう」

私は何故コイツを引き止めようとしているのだろうか？

コイツがいなくなれば華琳様はきっと私だけを見てくれるはず。

不条理な命令で体を汚されることもなくなるのに……そして……

……そして、コイツのあの笑顔も見れなくなる……もう、二度と……

ふと気付くと頬を涙が流れていた、アイツは此方に背を向けたまま振り向かない、

私もアイツに背を向けて振り向かない。

…こんな顔お互いに見られたくない。

サラサラサラ……

（……体が消えていく……俺の物語はここで終りのようだな）

「……けっこう楽しかったよ、華琳に下着……選びに付き合わされたりさ」

「変な下着選ばなかったでしょうね」

「酔っ払った春蘭がまる……で猫みたい……可愛かったり……」

アイツの声がだんだんと虚ろになって行く、気配も薄れて行く……きつと体も既に消えかかっているだろう。

「へえ、いいこと……聞いたわ、今度……グスッ……みんなの前でからかってやるわ」

「はははっ、ほどほどに……しといてや……れよ、キレたら大暴れしそう……だから」

「考えておくわ」

「風達に麻婆丼教え……たらみんな、うまいって喜んで……くれてさ」
「今度私も……食べて……グスッ……み、るわ」

「天和達……には思いつきき……つかわれて……」

「あれはアンタの天職だったのよ……」

「流琉が料理を……作って季衣が食べて……霞が祭りで大暴れし……て、風はすぐ居眠りして………稟は何か………という鼻血ふきあ………げて、そして………」

うっうっうっ……グスッグスッ……

「桂花は初対面の時から喧嘩腰で」

「！！！！！！！！！！」

「子供達には変な勉強方で教えるし、蛇が苦手で、落とし穴を作れば自滅するし……」

「わ、わる……グスッ……悪かったわね！」

「でも俺、桂花のこと……けっこう好きだったよ」

「！！……何で、何でそんな事言うのよ。」

「言わなければ気付かなかったかもしれないのに。こんな気持ち、気付きたくなかったのに……」

サラサラサラ……

「い、逝くなら早く逝きなさいよ……みんなには私から説明しといて……グスッやるわよ、あの種馬は面倒事全部押しつけてさっさと天に帰ったって……」

「うん、ゴメンな……辛いこと押しつけて……」

うつうつグスッ……グスッ……うつ……

「ここに、魏の国に……これで、良かったと……本当に思う……みんなにあえて……本……と……うに……たの……しか……た……よ……」

「うつうつうつ……グスッ……か、かず……かず……」

「……さよ……な……ら……け……い……ふあ……」

「……！……かっ……かず……と……」

私は思わず振り向いてしまった。もう其処に彼がいないと分かっていたのに……

もうあの声が聞けないと、もうあの笑顔を見れないと……

もうあの温もりを感じることができないと分かっていたのはずなのに……

サラサラサラ……

もう其処に彼は居なくて……あの笑顔は無くて……

ただ、小川のせせらぎだけがあった……

「うつうつ……か、かず、と……一刀……一刀お……」

何で居なくなるの？何でずっと此処に居てくれないの？何で？何で？何で？……

「一刀……一刀……かずとおおおお……っ！……うわあああああ……んっ！……」

いくら問いかけても空に光る月は何も答えてはくれなかった……

サラサラサラ……

サラサラサラ……

……少し時は流れて……

今日から数日間は年に一度の三国の同盟記念祭が行われる。
今年は魏が開催国で、ようやく準備が終わった所だ。

「華琳様、立食ばーていの準備が整いました」

「そう、じゃあ後は他の皆に任せて「貴女達」も楽しんでいらっし
ゃい」

「えっ？でもまだ色々やらなきゃいけない事が…」

「いいから、あなたこの所準備に追われてるくに休んでないじゃない、命令よ二人でゆっくりしていなさい、ねえ」

華琳様がそう言うのと、その後ろから一人の子供が現れた。

その娘こそ、私とアイツの……一刀との一人娘。

「うん、ありがとうりんさま、かかさまいこう！」

「分かったわよ、それじゃ華琳様すみません。行きましょぢや鞘花」
「わ〜い！！ かかさまといっしょ♪ かかさまといっしょ♪」

私は鞘花と手を繋ぎ、城の中庭へと歩いて行く。

「しかしあれだけ城中の女に手を出しておいて、孕んだのが桂花だけとはね。まったく魏の種馬の名が泣くっていうものよ」

「いえいえ、まだあきらめるのは早いのですよ」

「どういう事？風」

「あのお兄さんの種ですよ、あと三年くらいは風達の中で元気にしてるでしょうからまだちゃんすとかいうものがありますよ」
「…やけに説得力があるわね、まあいいわ桂花がないぶんしっかりと働いて…」
「ぐっ……」
「起きなさい！」
「おおっ」

木にもたれながら木漏れ日の中で鞘花を膝の上に抱いていると、鞘花が何時ものおねだりをして来た。

「ねえかかさま、ととさまのおはなしして」
「また、昨日の夜もしてあげたじゃない」
「うっっグスッ…」
「うっ……。わ、分かったわよ。こっちにいらっしやい」
「うんっ」
「あなたのお父さんは…変態で手が早くて浮気者で…」
「うんっうんっ」
「そのくせ正義感はやたら強くて……」
「うんっうんっうんっ」
「そして…あのお日様の様に、皆を………」

{
F
i
n
}

桂花1「別離（わかれ）」（後書き）

一姫伝に出て来る鞘花さやかはこの作品で生まれました。

ここでは桂花と一刀の娘です。

ちなみに鞘花は、他の作品にも出てきます。

（他のサイトで書いているGS美神と恋姫とのクロス小説とか…）
この娘、本当によく動くから使いやすいんですね。

桂花2「帰郷」(前書き)

僕は基本「ハッピーエンドスキー」なので、書いた話です。

桂花2「帰郷」

彼は乱世に舞い降りた。

彼は乱世で皆と出会った。

彼は乱世で戦った。

彼は乱世を終わらせた。

そして彼は世界から消えた。

多くの彼への想いと

彼の命を受け継ぐ娘を残して……

彼の娘、真名をさやか鞘花

……っていったの」

「うつつ、グスッグスッ……」

「まったく、この話するとすぐ泣くんだから」

「グスッ、えへへ、でもかかさまのするととさまのおはなしだいす

き」

「ほかの誰かからも話聞くの？」

「うん、あのねかりんさまでしょ、ふうちゃんにりんちゃんにきいちゃんるちゃん、しゅうらんおねえちゃんにしゅんら、「アイツだけは駄目！」わあっ！」

コテン

「あっごめんなさい」

「ふう、びつくりした」

「でもアイツはろくなこと言わないでしょ」

「うん、しゅんらんおねえちゃんのおはなしはよくわかんない」
「それでいいのよ、さてこれからどう」

どうしようかと思った所に兵士がやって来た。

「荀？様」

「どうしたの？」

「はっ申し訳ありませんが厄介な問題が発生しましたのですぐに来てほしいと樂進様が」

「分かったわ、すぐに行きます」

「はっではこれで」

「ごめんね鞘花、ちょっと行ってこなくちゃ」

「うんいいよ、かかさまのたいせつなおしごとだもん。さや、いいこでまってるよ」

鞘花はそう言つと、花の様な笑顔を浮かべる。

ああ、ダメ。可愛すぎる。

「ああ〜なんていいコなの、よしよし、すりすり」

「きゃあゝくすぐったいよかかさま」

……まさかここまで子煩悩になるとは、華琳すら最初は啞然とするほどだったという。

「じゃあ行つて来るからいい子にしてるのよ」
「はい」

鞘花視点

「あゝあ、つまんないな」

りっしょくぱーていのじゅんぴはできたっていったけど、まだとうかおねえちゃんやれんふぁおねえちゃんたちがきてないから、かいじょうにいつでもじゃまになるよね。

「りんりんちゃんやしゃおちゃんたち、はやくこないかな」

！！そっだあそこにいこう、きょうはちよつとあついかちよつどいいよね。

サラサラサラ……

おしろのちかくにあるおがわ。みずがきらきらひかって、さやはここがだいすき！
ただどかかさまはここにくるといつもかなしそうなおかおをする。

「きらきらひかってこんなにきれいなのになんでかかさまはあんな
おかおをするのかな？」

サラサラサラ……

クーン、クーン

あっおいぬちゃんだ、こっちにおいで。

！！ ワンワンワンツ、タツタツタツ

あっそっちじゃないよ、いっしょにあそぼうよ、よし、まで……
っ。

ふう、ふう、ふう、どこにいったのかなあ？

ワンワンワンツクーンクーンツ

あついた、そっちだな。ん、あれえ？

サラサラサラ……

クーンクーン、チュンチュン、チチチチチ……

だれだろう？知らないひとがいる。おいぬちゃんやことりさんたち
にかこまれている、いいな。

「！！」

あつこちむいた、おとこのひとだ、だれなのかな？

知らないひとにちがづいたらだめだってかかさまやかりんさまたちにいわれてるんだけどわるいひとじゃないみたいだし。

それにきらきらひかるしろくてきれいなふくをきて、やさしそうなえがおでまるで、おはなしできくとさまみたい。

サラサラサラ……

「あの〜」

「ん？何だいお嬢ちゃん」

「あなたはだあれ？ここはぎのくにのおがわだから知らないひとはきちやいけないんだよ？」

「うん、そうだね。でも俺は昔この魏の国でお仕事をしてたんだ、ちよつと旅をしてたんだけど今日やっと帰ってこれたんだ」

「そうなんだ、じゃあおかえりなさい」

ペコリッ

「うん、ありがとう！きちんと挨拶ができるいい子だね。」

ナデナデ

「！！ あいさつしたらなでてくれた。えへへへ、このひとのおてであつたかい♪」

「あのねあのね、わたしのなまえはさやかかっていうの、よろしくね」
「でもそれって真名だろ？会ったばかりの俺に教えていいの？」

「うんっだつておにいちちゃんわるいひとじゃないもん！さや、ちやんとわかるよ」

「じゃあ真名を覚えてくれたお礼にいいものあげよう」

「いいもの？」

「うん、これはねチョコレートっていう遠くの国のお菓子だよ食べごろん」

「ちょこれいとお？」

クンクンッ…ペロリッ

！……！うわぁっ

パクリッモグモグモグ。

うわぁっ…うわぁっ…うわぁっ

「おいしい！おいしい！おいしいよ」

「はははは、もう少しあるからゆっくりお食べ」

「ううん、あとでりんりんちゃんたちとみんなでたべる」

「うん、やっぱりさやちゃんはいいい子だね」

ナデナデ。

えへへへ…ナデナデきもちいい！

サラサラサラ……

おにちゃんにひざまくらしてもらって、あたまナデナデしてもらって、なんだかねむくなつてきちゃった。

サラサラサラ……

おがわのせせらぎがこもりうたみたい、おっきなおてて、あたたかいおひざ、ととさまのおひざも……こんな……ふうなの………かなあ………。

くう……………。

「……………」

サラサラサラ……

桂花視点

「鞘花、鞘花、鞘花ー！。何処に行ったのかしら、鞘花ー！。」「（きつとあそこね、まったく私が苦手だってしってるくせに）」

サラサラサラ……

まったく、此処は嫌いだ、あの場所とほとんど同じ。

小川のせせらぎも、川面のきらめきも、風の匂いも……。

…すべてがあの日^{わかれ}の別離を思い出させる。

サラサラサラ……

「鞘花——どこなの、さや……か………」

サラサラサラ……

そこには信じられない光景があった。

日の光を受けて光る白い服、何もかも背負おうとする広い背中、風に揺れる柔らかな髪。

そして彼の膝に寄り添って眠る「私達の娘」

「……………」

「……………」

以前と同じ笑顔がそこにあった、申し訳なさそうな、照れくさそうな、嬉しそうな笑顔が。

サラサラサラ……

もう、このせせらぎは嫌いじゃない、川面のきらめきも美しい、風の匂いも愛おしい。

ガサガサッ

「!?!?!」

ワーワーワッ

どうやら彼女達も気付いたらしい、驚いた声、嬉しそうな声、泣きじゃくっている声。

ワーワーワッ

ドドドドドッ

皆がやって来る、私はまだ一步も動けないでいた、あの時と同じように頬を涙が流れていた、でもあの時よりも熱く、そして止めどなく。

ワーワーワーワーワッ

「.....」

ドドドドドドドドドドッ

彼は何か言ったが歓声と駆け寄る音にかき消された、でも私にははつきりとその言葉が聞こえた。

「んっ、うるさいなあ、えっ...うわあっなに、なに、なに？」

ワーワーワーワッ

ドドドドドドドドドドッ

）
F
i
n
）

「
た
だ
い
ま
っ
！」
」

桂花2「帰郷」(後書き)

桂花との話はもう一話「後日談」があります。

桂花3「せせらぎの子守歌」(前書き)

括弧などが無いのは仕様です。

こういうイメージで頭に浮かんだもので、
携帯では読み難いでしょうがすみません。

桂花3「せせらぎの子守歌」

さらさらさら……

ねえととさま、さやおひるねしたい。

ん、じゃあお城に帰ろうか？

うんう、ここでおひるねする。

ととさま、こもりうたうたって。

子守歌？鞘花はもう赤ちゃんじゃないだろ。

きょ

でも、さやととさまのこもりうた、だいす

でも、かかさまが心配するぞ？

うつつグスッ

仕方ないな、鞘花は本当に甘えん坊だな。

デもして。

えへへ、あまえんぼうでいいもん、ナデナ

まったく、はいはい。

ナデナデ

えへへ／／／

わらわらわら……

♪さくらさくら、さくらさくら、

小川のせせらぎ、

ちゅーんちゅん、ちゅーんちゅん、

小鳥が歌う、

ひゅーうひゅう、ひゅーうひゅう、

そよ風ふいて、

きーらきら、きーらきら、

木漏れ日光る、

森の木陰でぼくたちは、

仲良く一緒にあそんでる、

動物たちも駆け回る、

にーこにーこ、にーこにーこ、

みんなは笑顔、

ぽくぽか、ぽくぽか、

暖かい日ざし、

なでなで、なでなで、

大きなおてて、

すくやすや、すくやすや、

おひるねしてる、

さくさくさく、さくさくさく、

小川のせせらぎ、

さくさくさく、さくさくさく、

せせらぎのこもりうた、

くうくう、くうくう、

やっぱりここにいたのね。

ああ、何か用事があるのか？

から、

お昼寝の時間なのに城にいない

に来たのよ。

探し

ごめん、帰ろうと思ったけど、

鞘花がここでお昼寝したいって

いつ

たんでしょ。

あの目をされると断れなくてさ。

ああ、あの目はねえ、

それより今

の歌は？

鞘花がねだるから作ってみたんだ。

そう、じゃあ今度風の子供にも

聞かせて

あげなさい。

！？ふ、風の……

ええ、今城で風がおおはしゃぎ

してるわよ、

華琳様は複雑そ

うな顔を

し

てたけどね。

はははは……

しばらく寝れないだろうから

覚悟

しとくのね。

は、はははははは……はあ…

くぐぐぐ、くぐぐぐ

(こころはあたたかい、
ととさまがいて、かかさまがいて、
さやはとてもしあわせ)

くぐぐぐ、くぐぐぐ

わらわらわらわら……

～F.i.～

桂花3「せせらぎの子守歌」(後書き)

これで桂花の話は終わりです。

再構成版も書いたけどいまいちだったからなあ。

魏√・風END（前書き）

桂花に続き、もしも風が一刀を見送っていたら。

そんな話です。

魏√・風END

ザッザッザッ

一刀は一人で歩いていて、彼の後ろの方では宴で賑わっていた。

「……みんな怒るだろうな、勝手に一人で消えたりしたら、……でもやっぱり面と向かって別れは言えない、辛すぎる……だから、ゴメンなみんな……」

ザッザッザッ

サラサラサラ……

歩き続けた一刀は小川のほとりに出た。

「……これでいいんだよな、華琳を中心に天下は統一された、民の皆もきつと平和に暮らしていける、みんなに笑顔がもどる。きつと俺はこの為に此处に来たんだ、俺の役目は終わった……だから、……これでいい……いいわけじゃないですか……」――

サク、サク、サク、

驚いた一刀の前に一人の少女が木陰から出てきた。

「…風……」

「どうしてそんな事を言うんですか？お兄さんが此処に来たのは本当にその為だけなんですか？華琳様や風達に出会ったのはついであつたんですか？…いくら平和になつたからって……」

このままお兄さんがいなくなつて…グスツ……それで…それでよかつたと…うつつ…喜ぶ人が…笑う人がいると……

グスツグスツ…本気で思っているんですか？……ふ、風は…グスツ…風はいやです。…グスツ…風はお兄さんがいなければいやなんです！！」

タツタツタツ…ガバツ

風は一刀に駆け寄つてしがみついた、絶対に離さないと…何処にも行かしないと…

たとえ運命が相手だろうと渡さないと…つかのよつに……

「うつつ…うええ……グス、グス、…うえええええ……」

「風……俺は……」

「ダメです！ダメです！…うつつ、…いやです……！！」

風は一刀にしがみついたままイイヤイヤと首を振り続けた。

「風、俺だつて…俺だつて……」

一刀も風を抱きしめて頭を優しく撫でた。

「お兄さんは無責任です、お兄さんは…お兄さんは…うええ、うええええ…お、お兄さんはもうすぐお父さんになるんですよ…それなのに、風達を、風達を、風達を置いて行くんですか？」

「そうか、俺も父親か…可愛い子供だろうな」

「当然じゃないですか…風達の、風とお兄さんの子供ですよ、可愛くないわけがないですよ…グス、」

「そう…だよな…男の子かな？…女の子…かな？」

「きっと女の子ですよ、…お、お兄さんは…うつつ…女の子が大好きですから…」

「はははっ…さ…すぐに自分の子供に手は…ださな…いよ…」

風の腕の中で一刀は淡い光に包まれていく。

「お城の庭で…グス、風が赤ちゃんを抱っこして…」

「ああ…」

「その風を…グス、お兄さんが抱っこして…」

「…ああ………」

一刀は目をつむりながらその光景を思い浮かべた。

ゆっくり、ゆっくりと一刀の姿が薄れていく。

「…うっ、うええ、そ、そのまま三人でお昼寝して…グス、」

「ああ……いい……な、三……人いっしょで……幸せだ……」

薄れていく一刀の瞳から涙が流れ、その一滴が風の頬に零れおちる。

「うっ、うっ、うん」

「名前……か……が……えない……とな、幸せな樹で……幸樹まゆみはどうか
な？」

「ふふっ、す…素敵です…きつと、グスツきつとみんなを…樹の枝のように…包み込んで幸せに、幸せな気分にしてくれますよ…グスツ…」

「ああ……きつ……と、きつと……みんなを……きつと……き

「ううううう、うええ、お、おに、お兄さん、う、うえええええ」

一刀は風の腕の中で光の粒となつて消え去り、風の一刀を抱きしめていたはずの手はそのまま自分の腕を掴んでいた。

「お、お兄さ……うううつ……か、ずと……一刀さん、一刀さん、うううつ、うええええ……んっ、うええっ、うわああ……んっ、いやです、いやです、こんなの……一刀さんがいないなんて……さびしいです、こんなのいやです、うううつ、

うわあああ~~~~ん!!」

倒れ伏して泣きじゃくる風を離れた木陰から見守る二人がいた。

一刀がこの世界に降りた時に初めてであった三人の内の二人、星と稟だった。

「…行つてやらないのか、稟？」

「私が行つて何ができるといんですか？私に出来ることといったらここで見守つて一人で泣かせてあげるくらいのものです、それに…」

「それに？」

「あの人が消えて悲しいのは風だけではないんですよ？」

そう言つて稟はさみしげに微笑んだ。

「…！す、すまん、考えが足りなかった」

「いえ、いいんですよ」

「…なあ稟、もし…もしあの時、一刀殿と一緒に連れて行つたら、

結果は変わっていたのだろうか？」

「さあ、どうでしょう？あの人のことですから結局無理をしてたでしょうね」

稟はそう言っが星は考えてみた、もし一緒に旅をしていたら、もし一緒に

桃香と出会っていたら、

もし桃香の下で共に闘っていたらと…別の形の平和がきつとそこにあったのではないかと。

（一刀殿、あなたは本当にひどい人だ。風達だけじゃなく私達まで置いて行くなんて）

そう言って稟は自分のお腹をなでた。

「うわあああ~~~~ん！」

空には彼女達を見守るように月が光をはなっていた。

くそして時は流れてく

キャツキャツキャツ

バシャバシャバシャツ

夏の日差しの中、三人の子供達が小川の中で水浴びをして遊んでいる。

その光景を優しげに見守っているのは風だった。

その子供達は一刀が残して行つた子供でもある。

「ふうかかさま〜」

桂花との娘、さやか鞘花。

「おかあさん〜」

風の娘、あさき幸樹。

「ふうかあさま〜」

稟との娘、しづはる柱葉。

「はいはい〜、風はここですよ〜」

今日は城の近くの小川で風と稟ちゃん、そして桂花ちゃんの三人の子供が水遊びを楽しんでいる。

結局あの後、華琳様をはじめ武官、文官全員の妊娠が発覚した。

お兄さんがいなくなつてみんなが悲しみに暮れたが生まれてくる子供達の為にも早く立ち直らなければならなかった。

幸いにも生まれてきた子供達はみんな可愛くて悲しみが癒えるのにあまり時間はかからなかった。

「えいつえーいつ♪」

バシャツバシャツ

と幸樹が鞘花に水をかける。

「きやあゝこのお、やったなゝゝ、えいつ！」

バシャツバシャツ

と鞘花はお返しにと反撃するが、勢い余つて柱葉にかかつてしまう。

「ぷわあつ！なんでわたしにかけるとですか、えいつ！」

バシャツバシャツ

「きやあつやりましたねゝゝ、おかえしです♪」

バシャツバシャツ

子供達はみんな笑顔で遊んでいる、幸せそうに…

そんな風に微笑んでいる風の後ろから足音が聞こえて来る。

サク、サク、サク、

これもみんな、お兄さんがいたから、

サク、サク、サク、

お兄さんががんばったから、

サク、サク、サク、

だから風達だけじゃなく、お兄さんも幸せになる権利があつたんです、

サク、サク、サク、

だから、だから、だから。

サク、サク、サク、

「風は信じていました、待っていました、この日が来るのを」

「だからだな、信じていてくれたから…だから俺は」

「はい、お帰りなさいお兄さん！」

「ただいま！風」

そして風は勢いよく一刀の胸の中に飛び込んで行く。

その光景を見ている三人の子供達。

「ん、あれえ？ねえ、さきちゃん。あのひとだあれ？」

「おかあさんをだいてる、だれだろう？」

「あつ！！あのきらきらしたしろいふく。も、もしかしてとつひま？」

「「ええ……っ!？」」

「はい、そうですよ!みんなのお父さんですよ」

「えっ…さ、三人も？」

お父さんと呼ばれた一刀は目の前に居る三人が子供と聞いて驚くが…

「何を言ってるんですか、そんなわけないでしょう」

「だ、だよな…」

「もちろん全員子供を産んですよ、ちなみに華琳様は双子でしたよ」

「は、はは、ははは…」

その現実には乾いた笑いを浮かべる。

そして一刀に向かって……

タタタタタッ

「ととさま……!」

鞘花が駆け寄って来る。

「おとうさ……ん!」

幸樹が駆け寄って来る。

「とうさま〜〜！」

柱葉が駆け寄って来る。

そして、胸の中に飛び込んで来る子供達。

城に帰ればまだ、沢山の子供達が居るのだろう。

ガバアッ

「うええ〜〜〜ん！」「」

抱きついて来た子供達を優しく抱きしめ、一人ずつ頭を撫でてやる。

「いままでゴメンな、これからはお父さんも一緒だからな」

「さあ、お城に帰りましょう、『子供達』が待ってますよ」

「ああ帰ろう、俺の、俺の帰るべき場所に！」

そして始まる新しい物語。

〜終劇〜

魏√ i f E N D ・ 恋編（前書き）

この話はもし、恋が蜀ではなく魏に降っていたら。
もし、一刀を見送っていたのが恋だったら。

そんな設定で進みます。

魏√ifEND・恋編

「…一刀、一刀どこ?……」

曹魏と蜀呉連合との決戦は曹魏の勝利に終わった。

そして、華琳は蜀呉を吸収するのではなく三国同盟という形をとることにした。

恋は嬉しかった、闘いが終わっただけでなくさっきまで敵だった相手と仲良くできる。

皆で美味しいご飯を食べて皆で笑って皆と笑顔で一緒に居られる事が。

だから恋は一刀を探した、この平和を一番待ち望んでいた大好きな一刀を。

しかし、一刀は何処にも居なかった。皆と一緒に笑っているはずなのに……

途端に恋は不安に駆られた、譬え様のない不安に……

「一刀、一刀、一刀どこ?どこにいるの?」

ワンッワンッワンッ

「セクト？……セクトも一刀を探しているの？」

「キューン、キューン」

クン、クン、クン

「！！ワンッワンッワンッ」

タタタタタタタタタッ

「待つてセクト、恋も行く！」

そう言つて恋も走り出した。

タタタタタタタタタ……

走りながらも恋の胸には一刀との思い出が湧き上がって来た。

初めて一刀に会ったのは月の代わりに華琳の城に行った時だった……

（あの時はねねが説明は自分が全部するから恋は立っていればいいと言つてた、

だから立つたままねねの話が終わるのを待つていた。

そして前を見てみたら一刀が不思議そうな顔をして恋を見ていた）

『君が呂布かい？』

『だれ？』

『あ、俺は一刀。北郷一刀』

『かずと…』

ねねと霞が帰る準備をしてる間に一刀と簡単な話をした。

一刀とおしゃべりは不思議と楽しかった、だから帰る時に真名を教えた。

タタタタタタタタタタ……

「一刀、一刀、一刀……」

次に一刀と会ったのは袁紹が連合を組んで責めて来た時だった……
その中に一刀が居るのを恋は信じられなかった、一刀が自分たちを
いじめに来るなんて。

虎牢関で春蘭と闘っているとそこに一刀が来た。

『…何しに来た……一刀…』

『恋、俺達は別に董卓を倒しに来たんじゃない。どのみち朝廷はもう終わりなんだ、だからこそ俺達は力をつけなきゃいけない、朝廷が守ろうとしなかった庶人達を守る為にも。』

董卓は悪くない事を俺達は知っている、董卓も助けて見せる。だから恋も力を貸してくれ、俺達の仲間になってくれ！』

一刀の目はどこまでもまっすぐだった。だから恋は一刀を信じられた。

約束どおり一刀達は月や詠、ねねを助けてくれた。霞と華雄は劉備の所に行っちゃったけど。

タタタタタタタタタタ……

「…一刀、一刀、グスツ、一刀…」

あれからいろんな事があったけど、いつでも一刀は恋の傍にいてく

れた。

肉まんをいっぱい買ってくれた、頭をなでてくれた、手を握ってくれた、

いつしよにお昼寝してくれた、いつしよに笑ってくれた、抱きしめてくれた、

愛してくれた……

「一刀、一刀お……ぐしゅっ……かずとお……」

恋はすぐに一刀に会いたかった、その胸に飛び込みたかった、温もりを感じたかった。

いつしよに一刀を探していたセキトはずいぶんと先に走って行っていた。

「ワンッワンッワンッ」

セキトは焦っていた、たしかに一刀に近づいているはずなのに一刀の匂いが

だんだんと薄れていくのだ。このままでは一刀に会えなくなる、それは嫌だった。

セキトは一刀のお日さまの匂いが好きだった、なでてくれる温かな手が好きだった、

自分を包み込んでくれる大きな胸板が好きだった。

「キューン、キューン」

そしてセキトはついに一刀を見つけた、小川のほとりに立っている一刀を。

「！！ キャンキャンキャンキャン！」

「…セキト」

セキトの声はもうほとんど悲鳴に近かった、一刀の周りを吠えながらグルグル回り
ズボンの裾に噛み付いてグイグイ引っ張る、こんな処にいちゃダメだ皆の所に行くんだと。

「キューン、キューン、キューン」

「セキト……お前…わかるんだな……」

サクッ

「……恋……」

恋はやっと見つけた一刀を見て愕然とした。
目の前に居るのに一刀の気配がまったく感じられないのだ、まるで

幻のように……

「……やだ……一刀……ここにいて……ぐすっ……どこにもいつちゃやだ……」

「キャンキャンキャン！」

「恋、セキト……ゴメンな」

「いやだ！やだ、やだ、一刀はここにいるの！ずっと恋たちといっしょにいるの、

どこかに行くなんてぜったいダメ！」

ガバッ

恋は泣きながら一刀に抱きついた。

「恋、俺も何処にも行きたくない、ずっと恋達の傍にいたい。でもどうしようもないみたいなんだ。ゴメン、ほんとにゴメン」

一刀は恋を抱きしめ頭をなでながらそう言った。

「やだぁ……ぐす、ぐしゅ、そんなのいやだぁ……うつうつ……」

恋の腕の中で一刀は淡い光に包まれ、そこから光の粒が空に昇っていく。

それと同時に一刀の姿はだんだんと薄れていく。

「キャン！キャンキャンキャン、ワォーン！」

「いやだ！いやだ！うっう、ぐしゅぐしゅ、うわあああん」

「大…好きだった、うっん、大好き…だよ恋…今まで…も…これから…ずっと…いつ…ま…でも…れ…んが…だ…いす…」

一刀の体はすべてが光の粒となり恋の腕から零れ空へと昇っていった。

「キャン！キャン！キャン！キャン！……ワオーーーーー！」

「かずと？……うそだよね……どこにいるの…ねえ…かずとお…」

恋の目の前で最後の光の粒が消えていった…

「うっう、いやだよ…帰ってきてよ…もうわがまま言わないから…ぐすっぐすっ…うわああーーーーーん！一刀ー！一刀ー！かずとおーーーーー！」

「キャン、キャン、キャン、キャン、キャンーーーーー！」

恋とセキトの鳴き声が響く空には……眩く光る月が見守るように浮かんでいた……

く時は流れてく

「此処は？……」

青年は小川のほとりで目を覚ました、日の光を受けて光る白い服を身につけて。

「え」と、俺は何をしてたんだっけ？…あれ、この犬と子供は…誰だ？」

青年の左には赤いバンダナをした一匹の犬が、そして右には茶色の髪の小さな女の子が、青年に寄り添って寝ていた。

「俺は…誰だっけ……此処は何処だろう？」

「うおおおおおおおお」

ドドドドドドドドドドドドドドド

「何だ、この地響きは…それに物凄く命が危険な感じがするぞ」

「うおおおおおおおおおおおっ！」

ドドドドドドドドドドドドドドド

「だ、だめだ、早く逃げないとねねのキックが…って…ねね？」

「すーぱーいなずまちゃんきゅーきいーーーーーくっ!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオ!

「ぐおわああっ!」

一刀に渾身のキックを加えたねねは息を切らせながら一刀に畳み掛ける。

「はあ、はあ、はあ、今まで何処に居やがったですか、このチ。コ隊長!はあ、はあ。

今までどれだけねねが…げふんげふん…もとい、今までどれだけ恋殿が悲しんだと思ってやがるのです!」

「いてて…相変わらずだなね。(記憶喪失を一撃で直すとは…悔りがたしちんきゅーきっく)」

「ワフ?...!ワンワンワンッ!」

ぺろぺろぺろッ

「こら、やめろ、セキト、ははははは」

「ワンワンワンワンッ!」

「うにゅー、どうしたセキト?」

一刀の隣で寝ていた女の子が目を覚ました。

「そう言えばこの娘は誰?」

「この方は呂刃殿ですぞ」

「恋と一刀の子供……」

「恋！……ただいま、帰って来れたみたいだ」

「うん……お、おかえり……ぐすつ……一刀お、会いたかった！」

そう言つて恋は一刀の胸に飛び込んだ。

（この匂い、あつたかい胸の中、夢じゃない、ほんとの一刀だ）

「あ、あの……恋殿。つ、次はぜひとも……」

「かあさま、次はかずきの番」

「そ、そうですぞ。次は一姫殿に……」

「一姫、それがこの娘の真名か。おいで」

「うん、えへへ、とうさまいいにおい」

「そう、一刀はとてもいい匂いがする」

「そ、それではおじゃまして次はね……」

「ワンワンワン、キュ〜ンキュ〜ン」

「こら、やめないか、くすぐりたいぞ」

「セキトも一刀に会えてとても喜んでる」

「かずきもとうさまにあえてとてもうれしい」

「ああ、とうさまも一姫に会えて嬉しいよ」

「ううう〜」

「お城には華琳や月たちの子供もいる。早く会ってあげて」

「そうだな、早く会いたいな」

「うう、ぐしゅっ」

「さあ、ねね、来いよ」

「えっ？」

「ねねにまた会えてほんとに嬉しいよ」

そういつて一刀は手を広げる。

「うう、ねねは、ねねは淋しくなんかあったですぞー！また会えて嬉しくなんかない事はないですぞー！」

ねねは一刀の胸の中で泣きじゃくりながらそう言った。

（帰ってこれた、何故帰って来れたのかは分からないけどもう何処

にも行くもんか。

此処からまた始めるんだ、新しい物語を。皆で……）

（終劇）

魏√ i f E N D・恋編（後書き）

どうも、またやっちゃいました。

思いついたらどうしても書きたくなるんですね。

という訳でもし恋が魏に下っていたらという設定です。

話の中に書いてるようにこの外史では月と詠も魏にいます。

後、雛里と美羽も……

彼女達の話も当然あります。

魏√ifEND・雛里編（前書き）

この雛里は魏に降った訳ではなく、桃香と主に選んだ朱里とは別に、華琳と一刀を主に選んだという設定です。

魏√ifEND・雛里編

「えへへ、上手に出来た♪」

私の手の中には以前、一刀様に教えてもらった天のお菓子

「くつきい」がある、

失敗続きだったけど朱里ちゃんに手伝ってもらって

やっと上手に焼き上がった。

「やっぱり朱里ちゃんと一緒だと何でも上手くいく感じ。

…そうだね、もう三国で闘いが起こる事はないんだからこれからは皆で仲良く出来るんだよね…仲良く……。

一刀様も皆と仲良くするのかなあ……桃香さん綺麗だったな、朱里ちゃんも一刀様を見る時ほった赤かったし。

……愛紗さんも…星さんも……呉の人達はおっぱいおつきい人が多いし……種馬だもんな、一刀様…はあっ……」

宴の場は皆の笑顔で溢れている、華琳様が、そして一刀様が望んだ平和が此処にある。

これからはこの平和を守る為に闘っていくんだ、一刀様と一緒に……

「一刀様どこかなあ、早く食べて頂きたいのに」

「どうしたの雛里？」

「あっ、華琳様」

「それは何？何だかいい匂いがするけど」

「あわっ、あわわ、こ、こりえは、そ、そによお……」

「うふふ、分かっているわよ。一刀にあげるんでしょ」

「は、はひっ！／＼／＼／＼」

「一刀なら森の方に行っただわよ、火照った体でも冷ましに行っただでしょう。早く行かないと誰かに先を越されるわよ」

「はひっ！あ、ありぎやとうござりまつ……ガリッ……うっ、噛んじやいました。そ、それでは華琳様、がんばってくださいゆ！」

トテトテトテトテトテ……

華琳はその後ろ姿を辛そうな眼で見つめていた。

「……そうね、雛里……私達の代わりに一刀を……見送って……グスッ……あげて……」

華琳のその瞳からはどこまでも透き通った涙が流れていた。

はっはっはっはっ

トテトテトテトテ

「あっ、一刀様見つけた」

一刀は小川のほとりに立っていた、その姿はどことなく幻想的だった。

「ほあゝ／＼、そうだ、脅かしちゃお」

雛里は一刀に気づかれぬように木陰から近づいて行き、そしてすぐ近くにまで来ると一刀の呟きが聞こえてきた。

「これで大陸は一つになった……これで乱世は終わりを告げた…。俺の役目もこれで終わり……後は…俺が消えるだけか……」

「……………えっ?…」

カサッ

「!?!…………雛里…」

カタカタカタカタ

私の体が小刻みに震えている…ウソだ、そんなのウソだ……

「どういう…………事ですか?…」

「…俺の、天の御使いの役目は乱世を収めること…………その役目を終えた今、この世界に俺は居られないみたいなんだ……」

「そんな!…ど、どうして…………どうしてですか!…」

私の目からはぼろぼろと涙が零れている、さっきまでの楽しい気持が嘘のように心の中は悲しみに満ちていて、ぶるぶる震える手から

くつきいがぼろりと落ちた。

「これは？」

一刀様がくつきいの入った包みを拾って中身を見ると優しく微笑んだ。

「いい匂い、美味しそうだな。食べてもいいかな？」

私は泣きながらもコクリと頷いた。

「カリッ…モグモグ…うん、旨い。ありがとう、とても美味しいよ」

そう言って一刀様は私に一つ差し出した。私はそのまま食べてみる。

「美味しいだろ？」

「…お、美味しくないでしゅ…しょっぱくて…グスツ…甘くないでしゅ…」

グスツ…こん…どは…もっとじょ…うっ…上手に作りましゅから…
待っててくだしゅい…そして…華琳様や…風ちゃんや、季衣ちゃんや…

る…うっつ…流琉ちゃんや…けい…うえええ…ん…桂花ちゃんたちと

一緒に…み、みんなで…みんなと一緒に…た、たべ…食べたいでしゅ…

だか…だから何処にもいか、行かないで下しゅい。居なくなつては嫌でしゅ…」

私は我慢しきれなくなつて一刀様に抱きついた。
その拍子に帽子が落ちたけどそのまま一刀様の胸で泣き続けた。

そんな私を一刀様は優しく抱きしめて頭を撫でてくれた。

「ゴメン…俺も雛里達と、雛里と離れ…たくない。ずっと一緒に…居たい、此処で…みんなといつまでも…皆が…好きな…んだ…ひな……りが…雛里が…だい…大好きなんだ……此処に…居た…いよ」

一刀様は私を抱きしめ泣きながらそう言ってくれた。

目を開き顔を見上げてみると淡い光に包まれた一刀様がだんだんと消えていく。

「そ、そんな…嫌です、こんなの嫌です、消えないで、消えては嫌でしゅ」

抱きしめた一刀様の体から温もりが消えていく、
そしてその体は光の粒になって空へと昇っていく。

「たとえ…ここ…からいなくな…ても、何時までもみんな…の…ことを…想ってる…雛里の…事を、想ってるよ。いつ…まで…も…
……

そして一刀様の体は消えていった…私の腕の中から…この世界から…
……

「…これから…これからだったのに……これからみんなで…一刀様と…うつつ…うええ…うええ…ん！」

空には物言わぬ月がただ、光っていた。

く時は流れてく

「雛里ちゃん」

「あ、朱里ちゃん、久しぶり」

今日は一年ぶりの三国同盟記念日。

今年は蜀の国に魏と呉の皆が集まる年だ。

「お久しぶり雛里ちゃん。天里^{てんり}ちゃんも元気だった？」

「うん、元気だったよ。朱里おばちゃんは？」

「おつ、おば……ねえ、雛里ちゃん。後でゆっくりお話しようね」
「あわわっ……あ、あはは」

彼女は天里、一刀と雛里の娘である。

「それより朱里ちゃん達はまだ結婚しないの？」

「……さすがに勝利者は余裕だね、あれだけ立派な男性を知っちゃうと他の男の人じゃちよつとその気になれないというか」

「知っちゃうって、まさか！」

「はわわ、違うよ。まだそんな事はしてないし」

「まだってどういう事？いずれするってこと……まだ？」

まだって何だろう？おかしな言い回しだね。まるでそんな事が出来るみたいに。

「お母さん知らないの？管輅の占いの事」

「管輅の占い……それってまさか……」

「天より再び光舞い降り、乱収まりし大地の新たなる道しるべとなる。白き衣に身を包み、柔らかな光で世を照らす」

「……天里ちゃん？」

「はあ、ホントに知らなかったんだ。城にこもって本ばかり読んでいるから」

朱里ちゃんを見ると嬉しそうに微笑んでいた。

「だから『まだ』なんだよ」

「あ、あわわっ。そ、しよんな…天里ちゃんはそれでいいの？」

「それでも何も、あれだけ姉弟がいて、今更蜀や呉に増えたところで構わないというか」

「そういう事」

「はうわーっ！」

ワアアアアーーーーーッ

「はわわっ、な、何？」

「あわわっ、何かな？」

「占いって結構当たるのね」

「「えっ？」」

聞き返すと天里はすでに走り出していた、あの森に向かって。

「…あ、ああ」

「雛里ちゃん！」

「う、うん…うんっ！」

「行こう！雛里ちゃん」

そして二人も走り出した、あの森に向かって……
天より光が舞い降りる、あの森に向かって……

〕終劇〕

魏√ifEND・月編（前書き）

この月は、恋編で書いた様に一刀が月と詠を保護したという設定です。

魏√ifEND・月編

今、此処には笑顔が溢れている。

今、此処には笑い声が響いている。

華琳様が、桃香さんが、雪蓮さんが、私が、そして一刀様が夢に見た景色が…

今、此処にある。夢ではなく、確かに此処に。

「一刀様はどこかな？」

一刀を捜していると、森の中に入っていく一刀を見つけた。

「一刀様？何処に行かれるんだろう？」

人知れずに森の中に消えていく一刀を月は追って行った。

森の中に入り一刀を捜していると小川のほとりで彼を見つけた。

「一刀様、どうされたんですか？」

「月…まいったな、来ちゃったのか…」

「来てはいけなかったのですか？まさか逢い引きですか…？」

「いや、そうじゃないんだ。…そうじゃ………」

「一刀様？……！！か、一刀様…か、体が…」

月の目の前で一刀の体は淡い光に包まれていき、ゆっくりと消え始めた。

「一刀様……そ、そんな…い、いや…嫌——！一刀様——！！」

悲鳴にも似た声をあげ、月は一刀に抱きついた。

その体からは何時も感じていた暖かさは消え失せ、光の粒を撒き散らしながら

徐々に薄くなっていく。

「こ、こんなの…こんなのは嫌です。やっと、やっと平和になったのに……」。

これからみんなで…みんなで一緒に…うええ…うわああ〜ん」

胸の中で泣きじゃくる月を一刀は優しく抱きしめ、頭を撫でた。

「楽しかったよ、みんな…なに、月に…詠に、恋やねね…華琳達に会えて…ほん…とうに…」

「楽しかったんなら何処にも行かなけりゃいいじゃないですか。

ずっと、ずっと、……うつつ、ぐすつ…これからもみんなで一緒に……に……

「うわああ〜ん」

「居たいよ、俺だ…て、ず……とこ……に……」

「だったら…だったらあ……うわああ〜ん」

体からあふれ出てくる光の粒が照らし出す光の中で二人は抱き合う。ほとんど消えてほぼ透明になった両手で月の頬を掴み自分の方へ顔を向かせる。

そして、優しく唇を合わせると精いっぱい笑顔で言った。

「帰って来るよ」

「えっ…？」

「何時になるかは分からないけどきつと…いや絶対に帰って来る。帰ってきてみせる！だから、待っていてくれるかな…月……」

「はい…はい…はいっ！待っています。貴方が帰って来るのを、何時までも…グスッ…ま、待ち続けます…一刀様あ……」

胸に顔を押し付け泣き続ける私の頭を一刀様は優しく撫でてくれた。

「帰って来る…かな…らず…だか……ら…月を…たのむ…な…詠…」

一刀様がそう言うのと木陰から詠ちゃんが出てきた、頬を流れる涙を隠そうともせずに。

「あんななんか頼まれなくても月はボクが守ってみせるわよ。だから…だから…安心して何処にでも行っちゃいなさいよ！あんななんか…グスッ…あんなんかいな…居なくなつて…居なくなつて…うっ…淋しくなんか…グスッ…淋しく…うっ、うえええ…、かな、必ず帰って来てよ…約束だからね…」

詠ちゃんは相変わらず素直じゃない。こんな時くらい素直に甘えればいいのに。

「帰って…来るよ……ぜっ…たい…に……」

心に沁み込んでくるような笑顔と約束を残して一刀様は光と共に消

えていった。

「うつうつ、うつ……」

「…え、詠ちゃん…かず…一刀様が…一刀様が消えちゃった…居なくなっちゃたよ……、うわあああ……ん!!」

「泣かないでよ月、約束したんだから…帰って来るって…帰ってく……約束……うえええ……うええーん!!」

泣きながら抱き合う二人を照らす月は見守るよつに空に浮かんでいた。

ゝ時は流れてゝ

此処は城の中庭、二人の子供がはしゃぎながら駆け回り、追いかけていた方の子供が転んでしまう。

「うええ……ん」

「しっかりしなさい光! 転んだくらいで泣いちゃ駄目でしょ!」

「だって陽ちゃん、おひざいたいよ」

「その位何よ。全く仕方ないわね」

陽は光の膝を軽くなめてハンカチを巻きつけた。

光は陽より10分ほど早く生まれたが気の弱い甘えん坊で、陽はその逆にしっかりとした性格に育った。

「それにしてもあの男は何処で油を売ってるんだか」
「帰ってきたらとつちめてやるのです」

そんな中で桂花とねねは、少し？れた顔で空を見上げながら悪態を吐く。

「つまり、帰って来るのが待ちどうしいと」

「て、天里！あんだねえ」

「な、何を言つてやがるのですか」

「耳まで真っ赤ですよ。解りやすい答えをありがとう」

「勘違いするなです！ねねは別に……」

「……う、うう……ん……かかたん、どちたの？」

「お、起こしてしまつたですか。ごめんですよ、らら」

ねねの子供で真名を『蘭々蘭』、仲間内で最後に生まれた一刀との子供である。

少し大きくなつたセキトの背中では寝ていたらしい。

其処に一人の女の子が走つて来た。

一刀と桂花の娘、鞘花である。

「かかさま……！！」

「鞘花、どうしたの？」

「はあ、はあ、あ、あのね…むこうのおがわにね、かかさまがおはなししてくれた、しろくてきらきらしたふくをきたひとがいたんだよ」

「な、何ですって…！」

「ちよっと、それ本当！？」

桂花が驚き、詠が聞き返す。

「むう、ほんとうだよ。さや、うそつきじゃないもん…！」

「ふむ…、むにゃ、…くんくん」

昼寝をしていた恋が突然起きあがり辺りの臭いを嗅ぎ出した。

「どうしたのですか、恋殿？」

「…一刀のにおいがする」

「…か、一刀様の…？」

みんなが恋の言葉を聞いて呆然としてみると幸樹さきと柱葉ちゅうようそして一姫かずきの声が聞こえてきた。

「こっち、こっちだよ」

「はやく、はやく」

「いそげいそげ」

そんな声が聞こえる方に顔を向けると、其処には。

「そんなに引つ張らないでも大丈夫だよ」

其処には彼女達はその帰りを何よりも待ち望んでいた愛する人の姿があつた。

幸樹と柱葉に両手を引かれ、一姫を肩車していた。

「「とうちゃく」」

「ただいまみんな。…月、詠、約束通り帰って来たよ」

「…お、お帰り…なさ…い…かず…と…さま…」

「何がただいまよ…散々…待たせといて…何をいまさら…」

二人はボロボロ涙を流しながら一步一步、ゆつくりと二刀へと歩いて行く。

一刀も同じように歩いて行く。

皆も泣きながらもその光景を見ていた。

「一刀さまあゝ」

月が一刀に抱きつき、続いて詠もしがみ付く。

「遅い…遅いじゃない…」

「待たせてゴメン。でも、もう何処にも行かないから。ずっと皆の所にいるよ」

泣いている二人の肩を一刀は優しく抱きよせた。
其処に陽と光が近付いてきた。

「あ、あの、お母様、その方がお父様なのですか？」
「おとうさまなの？」

「この子達はひょっとして」
「はい。一刀様と…私達の…子供達です」

「お…とうさま…」

光が抱きつこうとすると…

「お父様…!!」

その横から陽が飛びついて来た。

「うわああ…ん」
「あゝ、陽ちゃんズルイ！」
「ズルくないもん！」
「よしよし、さあ、おいで」

一刀は陽の頭を撫でながら光を手招きした。

「うっ、おとうさまあゝ」

光も一刀に抱きついて泣きだした。

「この娘が私の娘、陽です」
「こっちが私の娘の光よ」
「そうか、二人とも可愛いな」

そう言うと二人とも真っ赤になって照れた。

「えへへ、可愛いだって」
「てれちゃうね」

そんな二人を見ていると一刀はいくつもの視線を感じ、振り向いて見ると

子供達が物欲しそうに見ていた。

「え」と、この娘達は？」

冷や汗を流しながら尋ねる一刀に詠が答えた。

「もちろん、全員アンタの子供よ」
「やっぱり」

我慢できなくなった子供達は一斉に一刀へと駆けだした。

「ととさま」鞘花が、
「お父様」天里が、
「おとうさん」幸樹が、
「とつさま」柱葉が、
「とつさま」一姫が、
「とつたん」ららが、

「一刀お」恋が……。

一人ほど、大きな子供がいたようだ。

抱きつかれ、頬ずりされ、泣かれて、それでも一刀はようやく還って来た事を実感するのだった。

「もう…何処にも行かないんですよ？」

「約束したんだからね、守りなさいよ」

「ああ、何処にも行くもんか。今日から此処が俺の故郷なんだからな」

見つめあう三人だが…

「はいはい、其処までですよ。次は風達の番です」

パンパンと手を叩きながら間に割り込んできた。

「お久しぶりです、お兄さん」

「一刀様」

「一刀殿」

「一刀お…」

「遅いですぞ!!」

「ふんっ、この害虫!!」

「ただいま、みんな」

暖かな日差しの中、帰って来た男を主人公として、新たな物語は紡がれていく……

〈終劇〉

魏√ i f E N D ・ 月編（後書き）

書き終えてみると…

あれ？月編の筈なのに詠はいいとして、

何故か文官総登場。

子供達もららを加えて出てきてしまいました、何故だろう？

さて、お次は美羽編です。

魏√ i f E N D・美羽編（前書き）

もし、孫呉に滅ぼされて各地を放浪していた美羽と七乃が魏に捕ま
って保護されたら。

もし美羽が一刀を見送っていたら。
そんな話です。

魏√ifEND・美羽編

「によほほほほー」今日の蜂蜜水は格別なのじゃ」

曹魏と蜀呉同盟との決戦は曹魏の勝利に終わり、三国同盟は此処に締結した。

もはやお互いに敵対する事は無く先ほどまで武器を握っていた手には酒が握られていて、笑いながら酒を酌み交わしていた。

「ん？兄様、何処に行くのじゃ？」
あにさま

「ああ、ちよつと体が火照って来たから涼みにな」

「なら、妾も行くのじゃ。良いである？」

「……そうだな、じゃあ行くか」

「うん！」

美羽は一刀の手を掴んで後を付いて行く。華琳と七乃はその後ろ姿を辛そうに見送っていた。

「…馬鹿……お別れくらい言わせてくれたっていいのに……」

「美羽様……」

森の中、小川のほとりで美羽は一刀に膝枕をしてもらっていた。

「なあ、兄様。本当に争いは終わったのじゃな。これからは皆が笑って暮らせるのじゃな」

「ああ、終ったんだ。皆、笑って暮らせるさ」

そう言いながら一刀は美羽の頭を優しく撫でている。

「えへへ。兄様の手は大きくて暖かいのじゃ」

美羽もその手に自分の手を重ねて照れながらも笑う。

「これからも妾は兄様とずーと一緒におるのじゃ。そして……兄様の……子供を……」

「美羽？」

「すう、すう、すう」

自分の膝を枕にして眠り込んだ美羽の頭を撫でていると七乃がやって来た。

「……どうしても、駄目なんですね……」

そう、辛そうに呟いた。

「ああ……けっこう足^{あが}？いてみたんだけどやっぱりどうにもならなかった」

「美羽様が悲しみます……」

「…ゴメン、ゴメンな…美羽…」

眠っている美羽の頬に目から零れ落ちた涙が一粒、二粒と落ちていく。

「ううむ」

寝ぼけながら頬を掻く美羽を七乃に預けて一刀は立ち上がる。

「じゃあね。七乃さん、美羽をよろしく。…さようなら」

「…か、一刀さん。わ、私も貴方を…貴方が…好きでした…」

赤くなった目から止めどなく涙を流しながら七乃は想いを告白した。

「うん。節操がないかもしれないけど…俺は七乃さんの事も好きだったよ」

「うふふ。仕方ないですよ、一刀さんは魏の種馬なんですから」

「ははは」「うふふ」

お互いに笑い合うと一刀は背を向けて森の中へと入っていく。

…淡い光に包まれながら……

「ふむ…うん、むにゃむにゃ…七乃？」

美羽が目覚めると目の前には一刀ではなく七乃がいた事を不思議そうにしていた。

「七乃、一刀兄様はどこじゃ？」

美羽は辺りを見回しながら聞いた。

「美羽様、一刀さんは…帰られる…そうですね…」

「帰るじゃと、洛陽にかや？何故じゃ、まだ此处でやる事…は…」

美羽は七乃の頬を流れる涙を見て言葉を詰まらせ、そして悟った。

「まさか…天にかや？」

「…はい…」

「…嫌じゃ…嫌じゃー！！」

「美羽様…」

「兄様は約束してくれたのじゃ、何処にも行かぬと、ずっと傍にいてくれると…約束したのじゃー！！」

そう叫ぶと美羽は一刀の後を追いかける為に駆け出した。

はあはあはあはあ……

孫策率いる孫呉に攻め滅ばされた後、七乃と一緒に各地を逃げ回り、遂に魏に捕まってしまった時一刀は自分達を庇ってくれた。

『華琳様、このような者達は生かしておいても何の役にも立ちません。この場で首をはねてしましましょう』

『そうね』

『待つてください、美羽様は、美羽様だけは…』

『待つてたもれ、妾はよい。じゃが七乃は助けてたもれ、七乃はきつと役に立つのじゃ』

『な、何を言うのですか美羽様！私などより』

『こうなったのもすべて妾のワガママのせいなのじゃ。じゃから妾が責任を取って』

『いい覚悟ね、ならせめて私の手で…』

『待った』

そこで一刀が止める。

『あら、何故止めるのかしら一刀？』

『張勳さんの力を此処で捨てるのはもったいないよ。彼女の力はきつとこれからの魏の役に立つてくれるよ』

『それは聞き捨てならないのです』

『私達だけじゃ役不足だとも言うつもり！！これだから脳みその代わりに精液が詰まっている男は……』

『納得できる説明はして頂けるんでしょうね』

一刀は三軍師に詰め寄られるが涼しげな顔で答える。

『袁術には悪いけどはつきり言って彼女の領土を支えて来たのは張勳さんだよ。それも殆んど一人でね。それに俺は別に張勳さんに軍師になつてもらおうなんて言っていないよ。張勳さんに街の政策などを担当してもらえば桂花達はその分、軍の方に集中できると思うんだけど』

『なるほどね。でも信用できるの?』

『美羽様を助けていただけなら曹操様に絶対の忠誠を誓います。私の智の全てを曹操様に捧げます、私の誇りと私の真名「七乃」に賭けて』

『妾もじゃ。妾も誓うぞ、我が真名「美羽」に賭けて』

『……分かったわ。ならば貴女達の命と真名を預かりましょう』

『華琳様!』

『宜しいので?』

『仮にも袁家を名のる者が自らの真名を汚すと思うかしら?』

『思いませんね。そこまで誇りを捨てられるのなら庶人に紛れてひっそりと隠れ住んでいたでしょうから』

『そういう事よ、いいわね桂花、春蘭』

『はい……』

『では七乃には街の政策など、桂花達の手が回りそうにない事を担当してもらう事にするわね』

『御意!』

『そして一刀には美羽の御守りを任せるわね』

『へ?……何故に!?』

『何故も何も七乃が政策にかかりつきりになると美羽が野放しになるでしょ。誰かが付いてないと危なっかしいじゃない。貴方が責任を持ちなさい』

呆然としている一刀のズボンを美羽が掴む。

『ではよろしくなのじゃ、一刀兄様^{あにさま}』

『こらー!兄ちゃんを兄様なんて呼ぶなー!』

『そうです。そう呼んでいいのは私達だけです!』

『風達だけの特権なのですよ』

『じゃが一刀兄様が妾の御守りをするのは華琳姉様がお決めた事じゃ』

『うつうつ〜』

はあ、はあ、はあ、

そして、兄様は色んな事を教えてくれた。子供達との遊び方とか、お金というものは働いて稼ぐものだとか。

『はあ、はあ、つ、疲れたのじゃ〜。に、庭の掃き掃除が終わったのじゃ〜』

『お疲れ様です。これは働いた分の給金ですよ』

息も絶え絶えの美羽に侍女がお金が入っている袋を渡す。

『おお、これが給金かや。ちよっぴりしか入ってないのに随分と重い気がするのじゃ』

『それは美羽が働いて得た美羽のお金だからだよ』

『妾のお金……』

初めて手にした自分のお金、そのお金で買った蜂蜜は今まで食べて来たどんな高級な蜂蜜よりも遥かに美味しかった。

『こんなに美味しい蜂蜜は初めてなのじゃ!』

『そっか、良かったな』

『これも兄様のおかげなのじゃ。兄様に会えて良かったのじゃ』

『ははは。ほら、もう少し落ち着いて飲まないと。頬っぺたに付いてるぞ』

一刀はそう言つて頬っぺたに付いていた蜂蜜を指で拭い、そのまま自分の口に入れた。

『ひゃわっ! あ、あ、あ、兄ひやま…にや、にやにほ……』

『あつ、ゴメン』

『はうう……』

美羽は茹でダコのように真っ赤になって倒れた。

『お、おい。美羽。美羽……!!』

そんな二人を影から見ている者達が居た。

『はあ、隊長は遂に美羽はんまで落とすおつたで』

『隊長……』

『やつぱり、隊長は隊長なの』

『はあ……。照れて倒れる美羽様、可愛いです……』

はあ、はあ、はあ、あ、兄様……兄様あゝ

しどろもどろになりながらも兄様に好きだと告白した時も優しく笑いながら受け入れてくれた、何時までも一緒だと約束してくれたのに……

何度もこけながらも走り続けているとようやく兄様の後ろ姿が見えて来た。

「あ、兄様ゝゝ、兄ざ……あにじゃまゝゝ」

顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃになりながらも一生懸命に兄様を呼び続けた。

でも兄様の体は薄い光に包まれて消えかけていた。

「嫌なのじゃゝゝ、何処にも行つては嫌なのじゃゝゝ。や、やくじよぐ……約束したのにゝゝ、いつまでも、一緒なのではなかったのかやゝゝ」

美羽の呼びかけに一刀は振り返る。そして駆けてくる美羽を優しい笑顔で見つめる。

ぱくぱくと口が動くがそれはもう言葉にもならなかった。

「あにじゃまゝゝ……!」

美羽は泣きながら一刀に飛びかかる。一刀も優しく手を広げて受け止めようとするが……

「ふぎやつ!」

美羽はそのまま地面に倒れ込む。

「……うつ……うええ……うええ……ん」

美羽は見えてしまった。その胸に飛び込もうとした時、大好きな笑顔を残して消えて行つた一刀の姿を。

「あにさま……あ、あにさま……。うわああ……ん！兄様……」

駆けつけて来た七乃に優しく背中を抱かれながら、空に浮かぶ月の光に見守られながら美羽は何時までも泣き続けていた。

それから暫くして……

「美羽さん、美羽さんは何処ですか？」

「あら。お久しぶりですね、麗羽様」

「お久しぶりですね、七乃さん。美羽さんはお元気ですか？」

「ええ、それはもうすこぶる」

七乃はすっかり大きくなったお腹を撫でながら答えた。

「か、華琳さん達もそうでしたか…あ、貴女もですか……」

「はい」。最近はよくお腹を蹴って来るんですよ」

「あ、姫。あそこに美羽様が……え？」

「どうしたの文ちゃ…ん……え？」

「猪々子さん、斗詩さん。美羽さんがどうした……と……え？」

「あら……、呆然としてますね」

麗…（。㇔（…（つ㇔（ゴシゴシ（。㇔（…（つ㇔（

ゴシゴシゴシ（。㇔（…！？

猪…（。㇔（…（つ㇔（ゴシゴシ（。㇔（…（つ㇔（

ゴシゴシゴシ（。㇔（…！？

斗…（。㇔（…（つ㇔（ゴシゴシ（。㇔（…（つ㇔（

ゴシゴシゴシ（。㇔（…！？

「おお、麗羽姉様ではないですか。久しぶりなのじゃ」

「ひ、久しぶりでは無いですわ！…な、な、何なのですかそのお腹は！…」

美羽のすっかり大きくなったお腹を指さして悲鳴のような叫び声をあげた。

「何も何も、勿論一刀兄様との子供じゃ」

「ね、ねねちゃんが妊娠してたからまさかと思ったけど……」

「さすがは魏の種馬……」

「おうっ！」

「どうしたんですか、美羽様？」

「心配はいらぬ。子供がお腹を蹴っただけなのじゃ」

「美羽様もですか。私もさっき蹴られたんですよ」

「うむ、この幸せは母親の特権じゃの」

「そうですね。まあ、母親になるには相手が居ないとですけど」
「じゃの」

二人はそう言いながら横目で麗羽を見つめる。

「ムキーーーー！！何が言いたいんですの貴女達は！！」

麗羽は二人に掴みかかるようにするが、

「姫っ！駄目ですってば！！」

「もしお腹の子に何かあったら今度こそ私達死罪ですよ！！」

「ムキヤーーーー！！」

そんな騒ぎをよそに、美羽は窓から空を見上げていた。

（兄様、妾は元気な子を産んでみせるのじゃ。じゃから早く帰って来てたもれ）

笑顔で空を見つめ続けていた。

それからさらに数年後……

「此処は……？」

森の中に一人の青年が立っていた。

ガサッ

草の音に振り返ってみると、其処にはあの時泣きながら駆け寄ってきた少女の姿があった。

「あ、貴方は誰ですか？」

「…え…み、美羽？」

「あ、あの…ははさま母様のお知り合いですか？」

「は、母様？」

「てんう天羽様、どうしたんですか？」

「とつ十乃。この方、母様のお知り合いみたいなんだけど
「美羽様の？」

新たにやって来た少女には何処となく七乃の面影があった。

「君達は…ひょっとして……」

そして、其処にやって来たのは……

「兄様と私達の子供ですよ」

「お帰り、お待ちしていました。一刀さん」

七乃ともう一人は、すっかりと成長していたが一刀には一目で分かった。

「ただいま…七乃さん。そして……綺麗になったね。ただいま、美羽」

「あ、兄様……兄様――！！」

美羽は泣きながら一刀に抱きつく。あの頃は腰の位置だった頭も今では肩に乗せる事が出来る。

「母様…それでは本当にあの方が……」

「お母様……？」

七乃は二人の子供の肩を優しく抱き答えた。

「そう。あの方が乱世を収めた天の御使い、そして貴女達の父親ですよ」

「父様」

「お父様」

二人の子供は瞳を潤ませながら歩み寄ろうとするが。

「もう少し、もう少しだけ待っていてくださいね。私だつて我慢してるんですから。もう少しだけ美羽様に……」

「兄様、兄様……約束して下さい。今度こそ、今度こそ」

「ああ、約束するよ。今度こそ何時までも一緒だ」

抱き合う二人。見守る三人。

小鳥達の囁りと柔かな日差しが彼らを包み込んでいた……

〈 f i n 〉

魏√ i f E N D・美羽編（後書き）

最後の成長した美羽に違和感？

まあ、この彼女は子供を産んで精神的にもそれなりに成長したという事で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2508v/>

真・恋姫†無双・魏√END集

2011年9月11日13時47分発行